

雲助（花の雲助合肩）

水の流れと人の身は

果てはどうなる事ぢややら

どうとも斯うとも

今更に

愚痴はいやんな気楽がましよ

いとし可愛にそやされて

かゝつた恋の取持に

蠅ぢやなけれど雲助と

落ちても雲の名は脱けぬ

世は逆様ないとなみも

昔や金持地面持

今は分持ちとんぼ持

餅ぢや恐れる酒なら来なせ

酔へばナア酔ふ程ナア工長持や軽い

ヤットコ道心仏の性かえなんのこつたえ

女で男の豆いりはあられもないぢやないかいな

直ぐな街道横に行く

ませこせ節でやりやんしょう

上り夜船に櫂や艫ぢやとて揖を取ったえ

佐田や牧方淀水に

車がぐる〜と伏見へ着く工

オ〜イ〜親父どの其金こつちへ貸してくれ

与一兵衛吃驚仰天しイエ〜金ではござりません

娘化粧すりや狐がのぞく

賚の河原の地藏尊

一とつとやア〜と夜明くれば賑やかで

賑やかで飾り立てたる

松一と木変らぬ

色の世界に色なき者は

わしとか〜さんと糸取つて

居たらトノ事いの

東上総の夷隅の郡

村の小名をば金

沖に見ゆるは肥後様のエソレソレ〜船よ紋は九ツ九耀の星

蝶々留まれや菜の葉がいやなら葎の先へ

留まらんせ

泊る宿々部屋々々の身の上話もおかしがる

是でもわつちは流れの身

のほり詰めたる山形に

星の二ツもついたもの

味噌揚巻ぢやなけれども

月ぢや花ぢやにうか〜と驕りつくした間夫狂ひ

それから末は並長家一畳半も玉の床

来るたびたびに貸せ

金の成る木は持つまいし

まして勤めの身ぢやものを

その勤めより気の重いそも自らは雲井の上の宮仕へ

三十一文字がかけ橋の

恋故位をずる

天から滑り落ちの人

多くの恋の歌所でも烏丸ではないかいな

わしは越後の後家の子で

浜も田畑も沢山にその仕草さへ手にやつかぬ

かの獅子舞の角兵衛どんに打込んで

これが野中の一本杉を

主と想うて抱きついて

顔も体も脂だらけ

陀羅尼千巻よみし身も

熊野へ出たが墜落の始め

丸太船ぢやと名に立てられて

ちと癩癩もつむりにめで

仏のみ手の縁の綱

初めて往生吃驚比丘尼の成れの果

宗旨違イの神の告げ

千早振びし恋話

京の大原の梓巫女

湯立の時に負はれた男ツイ悪戯が

評判の名さへ高天ヶ原の中

たゞではないとなぶられて

とうとうかみ縁でこそ

こゝに集る野良仲間手柄ものではないかいな

これも気散じ酒機嫌

吉野の山を雪かと思れば

雪ぢやござらぬナア是の花の吹雪でこん

これのエうぬはなぜ見えぬか

午の刻だにサツサ何んの気の迷ひだ

立田の

川を錦と見れば

錦ぢやござらぬナア是の紅葉のしがらみで

こんござるよこれのエうぬは何故見えぬか

午の刻だにサツサなんの気の迷ひだ

酒に浮かるゝ浮き拍子面白や

実に全盛の花遊び

賑はしかりける次第なり

賑はしかりける次第なり。